

～企業コミュニケーションの価値を多面的に高める「場」～

日本には企業博物館が全国に1000はあるとみられています。企業博物館を立ち上げ自ら館長を務めた栗津重光さんが、全国200か所近く of 企業博物館の訪問で見出したコミュニケーション価値を、あますところなく伝えます。

世界のカバン博物館

〒111-0043

東京都台東区駒形 1-8-10 エース株式会社東京店内

<https://www.ace.jp/museum/>

入館料：無料

開館時間：10:00～16:30

休館日 日曜、祝日（年末年始および不定休あり）

【展示の概要】

バッグとラゲージの総合メーカーであるエース株式会社の東京店 7F～8F に展示がある。カバンの歴史や同社の貴重なコレクション、カバン作りの工程などが 7F に、同社の創業者・新川柳作記念館が 8F に設けられている。

【7F】①カバンの歴史②カバンのひみつ③世界のカバンコレクション④わたしのカバン⑤企画展示コーナーで構成されている。

旅行カバンがヨーロッパで発展したのは産業革命以降。それまでの人の移動は徒歩か馬を利用するかだったが、蒸気機関（自動車、機関車、汽船）の発達により長距離移動が可能になった。長期間対応のため数多くの荷物を持ち歩く必要性が生じ、収納物を入れる道具としてカバンの需要が高まっていった。そのような背景から、もともと馬具を扱っていた HERMES、GUCCI、LOEWE、LONGCHAMP などの老舗企業が馬具製作の技術を活かしカバンの製造を手掛けるようになった。そうしたカバンは動物の皮革が使われた。それらの素材が一覧で展示されている。鰐、鮭、亀、蜥蜴、鱉（えい）、馬の尻（コードバン）…等々。

③世界のカバンコレクションのコーナーではヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、アジア各地の特徴的なコレクションが小型のハンドバッグから、大型のキャビン・トランクまで数多く展

開されている。また 1919 年西園寺公望がパリ講和会議に首席全権として出席した際に使われたキャビン・トランクが同館のコレクションとして展示。西園寺は「最後の元老」といわれ大正天皇・昭和天皇を輔弼した。キャビン・トランク以外にも西園寺が携行した革トランクやハットケース、長持も一緒に。また、同じく寄贈品として、海軍中将だった故人（匿名）のコレクションもある。このように、一般の個人からの寄贈申請が数多くあるという。

④私のカバンコレクションコーナーでは著名人から寄贈された製品が並んでいる。提供者は長嶋茂雄、山下泰裕、三浦雄一郎、羽生結弦、青木功など、錚々たる顔ぶれだ。長嶋のカバンは読売ジャイアンツの監督就任時のもので、往時の背番号 90 が刺繍されている。

【8F】「新川柳作記念館」

創業者・新川柳作は 1915 年、石川県生まれ。兄を頼って上阪した際、たまたま見つけたカバン卸店に丁稚として採用された。業務を通してカバンの素晴らしさに目覚める。しかし第二次大戦中、素材である革製品の販売禁止令が出される等、仕事が激減したため会社の経営を考え自ら退職する。1940 年には戦時統制の解除もあり、24 歳で新川柳商店として創業した。1943 年には、徴用令により自主廃業するが、1946 年に営業を再開した。

戦後の 1953 年、取引先が持参した東洋レーヨン（当時・現・東レ）の「ナイロン」に商品開発のヒントがあると確信し、ナイロンを素材としたバッグを完成させる。これが一大革命となり、売り上げが急上昇、企業規模も拡大する。

その後、新川は世界のカバン事情視察のため

訪米。スーツケースの需要が伸びてゆくと予測した。米サムソナイト社と技術提携を結び、日本で最初に横型スーツケース「デボネア」を国内の工場で完成させる。当時輸入品のサムソナイトのスーツケースは大卒初任給に匹敵する高嶺の花だったが、材料の国産化や設備投資で1万円以下という価格を実現した新製品は、折からの海外旅行ブームにも大きく後押しされ、業容は拡大の一途を図る。

また新川は日本の現在の発展は、2000年にわたって文化や思想を中国から学んだことによるものだという考えを持っていた。日中国交正常化後1977年に初めて訪中し上海を訪れ、人びとの親切さに感激したという。何か恩返しはと考えていたが、1979年の二度目の訪中でカバンの縫製工場を訪ねた。天職のカバンで恩返ししようと、技術とモノづくりの精神を伝え、さらに、帰国後縫製用の最新型ミシンを送った。これが契機となり、中国で合同企業を立ちあげた。その後企業は発展、エースとの合弁企業となり、18年後には中国国内で10工場を建設、1000万本を供給するという世界最大規模の工場に成長する。新川は、1997年上海荣誉市民の称号を受け、2004年、89歳で最後の訪中を果たした時、上海エースの新社屋も完成した。

【栗津の視点=見どころ】

この博物館の開設は創業者の考えが反映されている。創業者は2008年に亡くなるまでの人



現在のカバンのハイブランド——HERMES や GUCCI はもともと馬具製品を作っていたことを説明する展示
(筆者撮影)。

生をカバン業一筋に歩んできた。1958年の欧州視察旅行の折、ドイツのフランクフルトを訪れた際に、皮革製品で有名なオッフェンバッハ市を訪ねる。皮革製品の博物館を訪問したもののカバン類の展示物が少なく、愕然としたという。

生業を世間への恩返しとして、カバンを一堂に集めた展示場を開設し、カバン文化、カバン産業の振興の一助になればとの思いが「世界のカバン博物館」開設の契機となった。新川は、世界各地にはそれぞれのカバンの歴史があり、独自の文化や風俗があることを知る。これらを広く周知したいという思いを実現するために博物館を開設した。新川はこの施設の初代館長も務めた。

この創業者の思いはその後脈々と継承され現在に至っている。1975年、当時は珍しい企業内博物館としてスタートしたが、現在では登録博物館の認定を受けるまで発展し、今日に至っている。